



三つの「目」が拓く、しなやかな未来

一人の児童から「校長先生、近江神宮に『三つ目』の珍しい御守りがあるよ」と教えてもらいました。その不思議な響きに誘われるように足を運んでみると、そこには私の想像を超える、本校の教育の根幹に関わる深い教えが待っていました。

その御守りに添えられた言葉には、「過去・現在・未来を見つめる霊力がある」と記されていました。これを見た瞬間、私は思わず背筋が伸びるような衝撃を受けました。なぜなら、それは本校が掲げる教育目標、「過去から学び、未来を展望し、今を大切に生きる子」そのものだったからです。

■ 「複眼」が育む、しなやかな心

私たちはつい、物事を一つの「目」だけで見てしまいがちです。しかし、今回出会った「三つの目」という考え方は、私たちが大切にしている「しなやかさ」の本質を突いています。しなやかさとは、決して折れない強さのことではありません。多様な見方や考え方をもち、状況に応じて視点を切り替えられる柔軟性のことです。「あんな考え方もある」「こんな方法も試せる」という複眼的な視点を持つことが、困難を乗り越える発想へと繋がります。三つの目の例をあげるなら「過去」から学ぶ目は 失敗を「ダメなこと」と切り捨てず、多角的に見つめ直して経験へと編み直します。「今」を大切にする目は目の前の事象に多面的な好奇心を持ち、「夢中」になってその瞬間を味わえます。「未来」を展望する目は固定観念を解き放ち、心に「創造的余白」を持つことで、ワクワクする明日を描き出します。

■ 問い続けることで、視点は増えていく

以前、本紙（NO.27）で「答えを探すのではなく、問いを探す」大切さについて触れました。より良い問いを立てるためには、自分の中にどれだけ多くの「目（視点）」を持っているかが重要になります。一つの目で見れば平面に見える壁も、三つの目で見れば、そこには奥行きがあり、通り抜けるための隙間が見えてくるかもしれません。

子どもたちが教えてくれる何気ないきっかけが、時として私たち大人に大きな学びを運んでくれます。今回、一人の児童の言葉から始まったこの「三つの目」の探求は、私にとっても修学院の教育目標を再確認する大切な時間となり、とても有意義な時間です。家なら我が子からもこのような大事な視点をもらうこともあるのではないのでしょうか。それが有意義な視点であるかどうかは受け取った大人が決めています。これからも、子どもたちが自分の中に豊かな「複眼」を育て、多様な発想でしなやかに未来を切り拓いていけるよう、「安心安全」な学びの場を耕し続けてまいります。ぜひ子どもたちの話に興味をもって聞いていただけたらと思います。



新しい「目」を開くために必要なこととは何でしょうか？